

バンクーバーにおける日系移民の活動と連帯：「新移民」を中心として

山田，千香子
長崎県立大学経済学部

<https://doi.org/10.15017/2339010>

出版情報：九州人類学会報. 31, pp.85-94, 2004-07-17. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：



バンクーバーにおける日系移民の活動と連帯 —「新移民」を中心として—

山田 千香子
(長崎県立大学経済学部)

はじめに

本稿は、第二次世界大戦後に日本からカナダへ渡った移民（新移民¹⁾・新移住者）、特にカナダ移民法改正（1967年）以降に始まる日本からの移民の流れに焦点を当て、30年余に渡る彼らの定住過程や日系社会での活動に注目し、カナダ日系社会の文化変容について文化人類学的手法により考察したものである。

カナダへの日本人移民や日系人²⁾、日系社会に関する研究は国内外ともにわずかである。さらに、これまでの関連研究は、戦前の移民を焦点に置いた調査が中心であり、本研究の対象となる新移民についての調査・研究は皆無と言ってよいほどである。カナダのエスニック集団の中でも極小マイノリティ³⁾としての日系集団は中国系のように可視的なコミュニティが存在しないこともあり、将来の展望としてその存続が懸念されている⁴⁾。しかしながら、それは戦前の移民集団のみに視点を置いた場合の懸念であり、新移民の流れを射程に入れていない論であると言ってよいだろう。新移民は、カナダへ移住してからわずか30年であり、歴史的变化をみるにはまだ日が浅いということであろうか。しかしながら、彼らの日系コミュニティでの活動状況は注目され、日系社会での代表的リーダーも生まれている。そうした状況からも、日系社会全体を総合的に捉えるには、戦前移民、戦後の新移民の双方を含めた上で考察しなければ、日系社会の現状は見えてこないと考えられる。

カナダの日系社会は、戦前からの旧移民と戦後の新移民とに分裂し、双方は交わることがないという言説⁵⁾がこれまで存在してきた。しかし、バンクーバーにおける日系人の祭典である「パウエル祭」は、そうした言説を覆す事例となっている。祭典を継続させ、維持している日系の活動団体に焦点を当て、彼らの活動内容や活動の変遷を通して、日系コミュニティの凝集性・ネットワークや構造分析を目的としている。

本研究は、「新移民」に焦点をあてることで、これまで対象者を戦前の移民だけに偏りがちであった移民研究やエスニシティ研究に新しい研究資料を提供できると考えられる。さらに、現在、多文化主義政策において先進国とされるカナダ多文化主義の実態を、ひとつのエスニック集団の状況から考察できると考えるものである。

本研究の資料は、日系コミュニティのなかでも日系人人口が集中し、日系人祭りがほぼ25年継続しているカナダ西海岸の都市バンクーバーにおける調査⁶⁾によって得られたものを中心としている。

I. 1967年のカナダ移民法改正とは

日本からカナダへの移住が促進され、「新移民」と呼ばれる層が増加したのは、1967年のカナダ移民法改正を契機としている。カナダの日系社会の変容や新移民の特色を捉えるには、まず、この法律の改正点を明確にし、日本からの移住者に及ぼした影響を考察することから始めたい。

I-1 カナダ移民政策の変遷

17世紀から19世紀にかけての初期カナダ社会は、複数の民族を抱えていても、表層に現れる文化的社会的異質性はフランス系、イギリス系という異質性であり、中心的な文化はイギリス系が担い、アングロ・サクソン中心の社会が築かれてきた。ヨーロッパからの移民が歓迎され⁷⁾、ヨーロッパ移民はカナダから土地と金銭的援助を受けて移民することができたが、非白人であるアジアからの移民は「異人種」「異文化」ゆえにカナダ社会へ同化不能と考えられていた。中国人に対しては「人頭税法⁸⁾—中国系移民法 (the Chinese Head Tax)」(1889—1923) が課せられ、日本人に対しては「紳士協定 (ルミュー協約) の締結」(1907—1928)、戦時中における「日系人拡散政策」(1944—1947)のように排斥を目的とする施策が採られた。1962年に移民法の大幅な改正が始まり、

1967年に「人種規制」が完全撤廃されるまでは、カナダの法律は一方的にアジア系移民を「人種」に基準をおき排除してきたといえるだろう。日系移民は1949年まで、中国系移民は1967年⁹⁾まで法的に排除の対象となっていたのである。

I-2 現在の移民政策

カナダの移民法とその施行規則¹⁰⁾は複雑でしばしば改定されてきたが、現在のカナダ移民政策は1967年の「人種規制」完全撤廃を基盤におき、さらに1976年改正によるポイントシステムの導入に基づいたものである。その特色は前面に Building a Stronger Canada のスローガンを打ち出し、「経済的に強いカナダ」をつくることを目標としていることである。カナダ移民法第6条において移民のカテゴリーは、基本的に次の3つに分類される。1) 経済移民¹¹⁾ (Independent immigrants)、2) 家族移民 (Family class immigrants)、3) 難民 (Refugees) である。その中でもカナダの移民選抜において経済移民に課される「ポイントシステム」(1976年移民法改正、1978年規制により登場) はカナダ独特の選抜基準となっている。

この「ポイントシステム」導入の移民選抜基準と重点は、カナダの人口と労働市場に見合うようになっており、移民応募者の職業技術・経験・能力がいかにカナダ経済に貢献しうるかに中心がおかれている。各職業が得点化され¹²⁾、その年にカナダで必要とされている職業などはポイントが高くなるシステムである¹³⁾。このポイントシステムの導入によって、近年、カナダ社会におけるアジア系移民の増加ということが注目される。さらに出身国をみるとアジア系のなかでも、とくに中国系移民の増加¹⁴⁾である。時期的には、1997年の中国への香港返還が身近な現実問題として射程に入ってから、香港からの移民がとくに著しい増加傾向を示してきた。

移民法の改正によって「人種規制」を撤廃し、職業技術や経験・能力を重視したことは、アジア系のなかで中国系移民ばかりでなく、数的には中国系よりはるかに少ないが、日本からの移住希望者の急激な増大にもつながった。日本からの移住者の特色としては、概して教育程度が高く、都市生活者といった点が挙げられ、さらに彼らが日本において従事してきた職業も幅広い。筆者のインフォーマントだけに限定しても、医師、会社経営、

画家、菓子技術者、県職員、建設コンサルタント、航空管制技術官、高校教諭、商社員、自動車整備士、出版社勤務、柔道インストラクター、大学教員、大工、TV修理技術者、旅行業、美容師、レストラン経営、その他と多種多様にわたっている¹⁵⁾。

戦前の移民の場合、その大半が漁業や農業が主たる職業であり、その多くが家族や親族の呼び寄せという移住の形態であったことに比較すると、職業においても個人移住という移民の形態においても、新移民の特色が浮き彫りにされるのである。

II. パウエル祭にみる活動と連帯

この章では、毎年夏の行事としてバンクーバーで開かれ、カナダ最大のエスニック・フェスティバルと言われる日系カナダ人の祭り「パウエル祭」と、それを支える日系組織の活動、連帯について考察する。毎年、バンクーバーでは数多くのフェスティバルが開催されるが、その中でパウエル祭は最も歴史の長いフェスティバルであり、2001年の夏で第25回を迎えた¹⁶⁾。「過去・現在・未来」というテーマを掲げた2001年は、2日目が雨になるなど天候に恵まれなかったせいか、観客動員数は例年の1万人を下回る人出となった。しかしながら、祭りへの参加団体は年々増える傾向にあり、70以上にもおよんでいる。

パウエル祭という名称は、戦前、多くの日本人商店街が立ち並び、日本人町の中心となっていたパウエル・ストリートに因んで名づけられている。例年祭りの会場となっているオッペンハイマー公園は、そのパウエル・ストリートに位置し、戦前の日系コミュニティの中心地であった場所である。

II-1 パウエル祭のはじまり

パウエル祭のスタートは、移民100周年を迎えた年の1977年に遡る。異なる世代・宗教・団体が一致団結して、コミュニティ全体で日系の歴史・遺産である「日系移民100周年」を祝うという考えがその土台となっていた。カナダ各地の日系組織もそれぞれに、どのような形で「日系移民百年祭」を祝うのかを考え、実行へと踏み出していたときでもある。実際に「祭り」を行うことは、ある意味で、100周年を祝うだけでなく日系人が100年に渡って受けてきた人種差別にも屈せず、こうしてカナダ社会に根づいて生きているのだという政治

的メッセージにもなるという考えが含まれ、さらに、祭りの会場をオープンハイマー公園にするという選択には、昔、日系人が栄えた土地をもう一度自分達のものにするという意味合いがあったのである。このように具体的に「祭りを行う」というアイデアが生まれたきっかけは、新移民であったY氏からの発言によるものだったという¹⁷⁾。またこの時期は、カナダ政府が多文化主義政策に力をいれ推進してきた時期でもあり、政策に掲げる「各民族の伝統文化を維持促進していくこと」と合致したのである。

「パウエル祭」開催に向けての運営組織は、組織の中心となるフェスティバル・コーディネーターの役とボランティア・コーディネーターの役に2名の三世が従事した。この2名は祭りが安定期を迎えるまでの数年間、ボランティアとしてコーディネイトに関わってきた。さらに、当初祭りに反対していた二世グループから最終的に協力を引き出し、とりまとめ役をした二世のK氏¹⁸⁾という大きな存在があった。

以上のような経緯を辿り、二世・三世・新移民等を含んだ数人の有志によって発案され、具体化されていった「祭り」は、第1回パウエル祭という形になって開催されたのである。コミュニティ内のほぼすべての団体や世代が一同に結集・協力し、祭りが実行されたわけである。それから25年後の現在、このパウエル祭は年々多々の問題¹⁹⁾を抱え分岐点になっていると言われているが、現存する二世・三世・新移民の組織を含むバンクーバーの日系組織がほぼ一同に結集するのは、唯一、この「パウエル祭」だけなのである。

II-2 パウエル祭と運営委員会

この祭りは「日系一世・二世が育んできた日系文化を表舞台に登場させ、同時に日系の人々が皆一同に会して楽しめる場を持ちたい」という願いのもとに、企画から運営等すべて多くのボランティアによって成り立っている。三世・四世、そして新移民の人々の参加、さらに近年では新移民の子供の世代である「新二世」といった若者たちによる積極的な参加が多く見受けられるようになった。

第25回パウエル祭運営委員会の構成をみると、理事会を中心とした構成である。中心である理事会委員会は、ほぼ一年前からその準備に入る。そ

のほかにプログラム委員会、ファンドレージング委員会、支援委員会、コーディネーター、広報、サイト等、7つの委員会に分かれている。その中でも、コーディネーターはさらに以下のように14の担当に分かれている。フェスティバル(コーディネーター)、ボランティア、子供テント、クラフトブース、フェスティバル・セールス・ブース、ファイアーホール・アートセンター、フードブース、仏教会、インフォメーション・ブース、ロトリー、出演者担当、通訳、ボランティア・パーティ、はちまき、等である。さらに、協力者・団体として名前を連ねているのは、歴代のパウエル祭コーディネーター、日本語放送 ICAS、日系博物館、ナショナル・日系ヘリテージセンター、Shin-Nova Digital Inc.、隣組、バンクーバー日本語学校、バンクーバー日本語学校、バンクーバー新報、Video In、等である。それぞれが日系コミュニティとさまざまな形でつながりの深い関係団体である。

II-3 パウエル祭の催し物

催し物としては、柔術、居合道、柔道、少林寺拳法、空手などの模範演技の披露、琴の演奏・日本舞踊・茶道・折り紙・指圧の実演、そして生け花・盆栽・書道・墨絵・演劇・落語・朗読・混声合唱団・ロック系の日系バンド演奏・ポップ系コンサート・太鼓演奏などが披露された。そのほか、相撲トーナメントや綱引きなども行なわれ、盆踊りでは、飛び入りの参加者も一緒に楽しんだ。初日のクライマックスは御輿担ぎである。当日最後の出し物ひとつとして予定され、担ぎ手への水かけが入り大いに盛り上がるのである。また、おにぎり・いなり寿司・巻き寿司・やきそば・たこ焼・今川焼き・饅頭・団子・かき氷といった食べ物ブース(祭り屋台)が立ち並ぶのも恒例であり、普段は食べられない日本的なメニューを、この場で楽しんでいる多くの姿が見受けられる。

日本の伝統芸能である太鼓は、演奏する集団の力が創り出すそのパワーによって北米の日系文化の復興を象徴し表現したものと受けとめられてきた。太鼓の演奏はパウエル祭で最も人気のある出し物のひとつとなっている。演奏グループも多い。次世代のプレーヤー育成となっている子供の太鼓グループである「ちび太鼓」をはじめとして、高校生のグループで日本から参加した「菊池太鼓」、カナダ初の女性太鼓グループの「さわぎ太鼓」、カ

ナダで最初に設立された「カタリ太鼓」等の演奏が披露された。「うずめ太鼓」は和太鼓を中心とした中に、サクソなどの洋楽器を取り入れ、さらに舞踏を組み合わせた独特の舞台を創り出している。そうした太鼓の演奏も含め、墨絵その他いくつかの展示作品（例えば陶芸など）には、日本の伝統文化というよりはカナダで再生された日系独自の文化、あるいは三世・四世・新二世のアイデンティティ模索の表出が窺われる。

この祭りの特色としてあげられる点は、祭りが行われる地域の人々を取り込み、観客としてはもちろんパフォーマンスの参加者としても、他のエスニック集団メンバーの姿が多く見られることである。日系人が集まり楽しめる場としてスタートした祭りが、参加者・観客に多くの日系人を動員しながら、彼らのエスニック・アイデンティティの確認場所となり、エスニシティの活性化の役割を担っているばかりでなく、カナダ社会に対して、日系文化を発信する場所にもなっていることが指摘できる。

Ⅲ. バンクーバーの日系組織

現在バンクーバーの日系人人口はおおよそ21000人（1996年の国勢調査）である。その日系人を代表するグループは大小おろまぜて200以上はあると言われている。そうしたグループを目的別に大きく分けると、ほぼ3つに分けられる。まず、はじめにあげられるのが日本語学校に関連した教育関係の組織である。2番目としては、県人会のような親睦を目的としたもの、3番目は、終戦後に選挙権取得のために結成されたという日系市民協会のようなコミュニティ・グループである。この章では、以上のようなバンクーバーにおけるコミュニティ組織を具体的に紹介しながら、個人移民として定着してきた新移民に中心をおき、彼らのコミュニティ活動やコミュニティ組織に焦点をあてて、彼らの定住過程について考察する。

Ⅲ-1 日系市民組織

現在、バンクーバーには日系市民全体への相談的役割を果たしながら、社会的連帯の機能を維持している団体がある。それぞれが非営利事業団体であり、日系市民にとって大きな役割を果たす組織となっている。ここでは、6つの組織・団体について紹介したい。

ついて紹介したい。

(1) グレーターバンクーバーJCCA（日系カナダ人市民協会）²⁰⁾

(Japanese Canadian Citizens Association of Greater Vancouver)：1938年～

戦前から続いている日系組織の代表的な団体である。グレーター・バンクーバーとその周辺地域の日系人全体を包括する政治的・文化的・社会的関心や利害を代表する組織である。NAJC(全国カナダ日系人協会)のメンバー組織である。日系組織の中でも、三世・四世の加入率が高く英語が中心言語となっている組織である。日英両語の日系コミュニティ誌である『月報 the bulletin』を発行し、敬老会やピクニックなどの親睦的な行事も開いている。『月報』の日本語編集担当は新移民のY・Tさんが、翻訳はTさんが担っている。JCCAはその活動分野として以下の4つを掲げている²¹⁾。

- ①すべてのカナダ人のために人権を擁護し、差別を撤廃すること
- ②先駆者である一世の精神を尊重しながら、日系人の文化的伝統を維持すること
- ③戦後移住者の適応と統合を推進すること
- ④日系人の若い世代の期待に応えること

(2) 隣組 (Tonari Gumi)：1973年～

1人のバンクーバー生まれの日系二世の呼びかけによって、日系老人のためにと創立された日系人社会ボランティア協会である。日系社会の「よろず相談所」と呼べる福祉事業体で、隣組の相互扶助精神が名称の原点とされる。開設以来現在まで、実質的コーディネーターをつとめるのは、新移民のY氏（前述の祭りの提唱者）である。常勤スタッフとともに常時100名を超す二世や三世・新移民のボランティアで構成されている。活動内容は高齢者や新移民者のための医療保険、失業保険、年金、民生などの社会保険手続き代行、法的解釈及び相談、講習会からワークショップ各種、昼食会、各種イベント、ゲートボール、カラオケ、英会話教室、手芸教室に至るまでさまざまである。一人暮らしの一世やオールダー二世への日本食の配達や、病院訪問などのプログラムを実施している。活動へ参加する三世にとっては、新移民も含んだ会は世代を超えた日系人との出会いの場であり、日系文化継承の場ともなっている²²⁾。

日系人が相互に助け合いコミュニティライフの向上を図るとともに、カナダ社会への参加と貢献を実現させるのを目的として、これまで、バンクーバー日系コミュニティの中心的組織として発展してきた団体である。

(3) グレーター・バンクーバー移住者の会

(Greater Vancouver Japanese Immigrants' Association) : 1977年～

移住者の会のスタートは、「カナダ（バンクーバーやその周辺地域）へ新しくやってくる人々に対して、先輩がボランティアでノウハウを教えていく…」という考えが契機となっている²³⁾。現在では、日系人移住者にとっての生活情報機関である。この会は日系人移住者の相互理解と、日本語での情報提供による支援を目的としており、年間で以下のような活動をしている。

①会報の発行：JCCA の月報 (bulletin) と合冊で毎月1回発行

②日本語による法律講習会（月1回）

③国際結婚を考える：JCCA と共催

④日本映画鑑賞会：総領事館と共催

⑤新年会：日系諸団体と共催

⑥精神衛生プログラム：異国で暮らす移住者の精神的問題に対処

⑦図書の発行：「日本語による法律講習会(2000年版)」「カナダの常識」

⑧その他：文化講習会を随時開催

(4) 日系ブレース (Nikkei Place) : 2000年秋～

日系ブレースは、日系文化センター、シニア住宅新さくら荘、ケア付き住宅(現在建設中)、そして日系ガーデンの4施設すべてを総括して指す名称であり、日系人全体の活動拠点という役割を担っている。昨年完成し、さまざまな催し物やスポーツ、文化プログラムが毎日のようにとりおこなわれている。

* ナショナル日系ヘリテージ協会 (National Nikkei Heritage Center Society) 日系文化センターを運営するための非営利社団法人である。多目的総合施設である日系文化センターは、日系人・カナダ人・日本人に文化・教育・レクリエーションなどのプログラムとサービスを提供し、この地における日系文化の保存、継承、紹介を最大の目的としている。

(5) アイカス

ICAS (Intercultural Action Society)

〈環太平洋文化交流協会〉：1985年～

アイカスは、国際的、あるいは民族グループ間の文化交流や相互理解を目的とし、1985年に発足した非営利事業団体である。その活動としては、日系社会の大切な情報源であり、娯楽のひとつでもある日本語テレビ番組の制作・放送が中心となっている。また日本の文化や芸術活動を奨励・促進するために展示会や講演会、音楽会、演劇など各種行事に協力、広報宣伝も担っている。このICAS 放送設立時に貢献した中心的メンバーは新移民の人たちであり、放送関連の拡大・存続については彼らの活躍に負うところが大きかった。現在抱える問題としては会員の獲得である。NHKの放送番組が有料ながら受信できるようになったことで、視聴者獲得のためNHKとの競合が起きている。ICASの受信にあたっては有料であり、登録会員制をとっているが、会員にならなくとも番組を視聴できてしまうことで、会員の減少が起きているのである。

(6) バンクーバー日本語学校と日系人会館

(Vancouver Japanese Language School & Japanese Hall) : 1906年～

1906年に日系人の手により創設され、カナダでは最も古い歴史と伝統を持つ非営利の文化・教育団体である。日本語教育と日本文化紹介のプログラムが生まれ、完成した5階建ての会館はコミュニティの各種催事・集会の場として利用されている。直面している問題として、学校・会館を取り囲む環境条件の悪化があげられる。日本語学校が位置しているのはダウンタウンのイーストサイドである。イーストサイドは貧困化とゲットー化が進んでいる区域であり、子供達が通学し学ぶ環境としては好ましくないことが指摘されている。今後の日本語学校維持存続の問題のひとつとしても懸念されている。

III-2 県人会

日本人渡航者の増加で排日運動が激化していた1907年9月7日、日本人町パウエル街の商店が二度に渡って暴徒に襲われ、被害を出した²⁴⁾。県人会の設立の時期を見ると、この事件が及ぼした影響は大きいと考えられ、この事件以後の設立が多く

なっている。県人会が物質的・精神的防衛手段としての意味づけを含んで設立されたと解釈できるのではないだろうか。広島県人会、滋賀県人会、紀伊同志会(和歌山県)、鹿児島県人会は、多くの会員を擁しこの暴動以前から存在していた有力県人会である。その後組織された福岡県人会、熊本県人会、神奈川県人会なども多くの会員を抱えていたが、そのなかで、とくに、熊本県人会の会員数は1900年代に680人を記録し²⁵⁾、他を圧倒的に凌駕してきたことが注目される。

戦後の新移民にとっても、県人会という日系組織は新天地での人的基盤・親睦団体としてまとまりやすいようである。現在、バンクーバーには県人会として10の団体がある(表7参照)。戦前につくられた県会会はどの組織も戦争をはさみ解散あるいは自然消滅しているが、戦前からの歴史を踏まえた上で現在も活発に活動している県人会がある。和歌山県人会や滋賀県人会である。会員の多くが二世・帰化二世・三世であり、そこへ新移民を迎え入れての活動となっている。

千葉県人会(2000年設立)や北海道人会(1998年設立)のように、近年になって新たな設立が見られるのは注目されることである。福岡県人会は新移民が中心となり、静岡県人会の場合は二世・帰化二世・新移民によって構成されている。山梨県人会、宮崎県人会、宮城県友の会などは小規模ながら、それぞれの交流、親睦会を楽しんでいる。

どの会も、会の目的として一様に「同県人の親睦」をあげており、活動内容としてほぼ共通性がみられる。新年会・夏のピクニックなどである。そのなかで沖縄友愛会の活動は、沖縄県庁と密接に結びついており、海外子弟の琉球大留学制度の実施などは注目される活動である。この制度は、1980年代の日本における地方自治体の国際交流熱が盛んとなったことと一致している。この時代に沖縄は、海外沖縄コミュニティとの交流を急速に活発化し、沖縄友愛会の子弟留学制度成立とも結びついたのである。現在沖縄友愛会の役員を担当しているT氏は1975年にカナダへ移住しているが、移住当初は県人会に対してあまり興味がもてなかったという²⁶⁾。「日本の小さいときの思い出を背負って、海外へ来てまで同県人で集まるとは思わなかった」と語る。しかしながら、滞年数を重ねていくうちに県人会と関わるようになったと述

懐する。そのなかで言葉の問題について触れられた。県人会についてのインタビューを重ねていく中で、県会会の大きな働きあるいは会員が県会会に求める機能として「共通の言葉・方言が聞ける、話せる場として」を第一にあげたのは、一人ばかりではなかった。海外生活者にとって言葉の問題は大きいものであろう。英語文化圏に移住し生活する中で、気兼ねなく自分の言葉で自由に話せる場の確保というのは、貴重であり必要なものと推測される。

III-3 趣味・文化・親睦グループ

新移民のグループで圧倒的に多いのが趣味・文化的な親睦を目的としたものである。その種類は多岐多様に渡っており、日系社会での会員の活動の活発さが伺われる。退職後に夫婦で移住したというK氏の場合は、カナダ社会にはまったくつながりもなく移住したが、当初はそれほど日系社会とのつながりを必要にも感じなかったという。ところが「その土地(日本)から離れれば離れるほど、時が経てば経つほど、思いが純化されてしまうような感じを抱いている」と語り、親睦会に加入したことで、徐々に日系コミュニティへと人間関係がどんどん広がったという自分の体験を紹介してくれた。

大学の同窓会関連の団体形成は、日本社会が高等教育の普及を迎えたのは戦後であり、明らかに戦後の新移民の特色として指摘できると考えられるが、唯一、戦前にも同じバンクーバーにおいて既に形成していたのが早稲田大学である。会の名称を「早稲田校友会」として1907年10月8日に、会員13名によって結成されている²⁷⁾。

以上の活動内容から次のような特色があげられる。新移民は親睦を中心とした県人会への参加や、趣味的な活動が多く、交際範囲も同じエスニック集団内に留まる傾向が見られることである。その特色は、二世が示してきた特色と共通するものであり²⁸⁾、興味深い点である。政治的、芸術的活動に積極的に幅広く参加する、あるいは目的によってはエスニック集団を越えた活動というのは見られない。

おわりに

日本人移民が異なる文化や社会構造の中に定着

していく際、大きな役割を果たすのが、日本人同士のつながりである。さらに彼らが創り出してきたさまざまな組織があげられる。仏教会やキリスト教会、出身地を同じくする者でつくる県人会や日本人会などである。戦前の初期移民の時代は、移住した人々が新世界の言語や習俗に慣れ、その生活様式を習得するということは簡単なことではなかった。しかも、排日という民族差別の壁にかこまれたカナダ社会においては、日系人のコミュニティやその組織は単なる親睦団体というわけではなく、彼らの生活空間そのものであり、相互互助機能を持ち、有効に働いていたのである。旧移民においては、以上のような過程を辿りながら、新しい文化への適応を図ってきたと言えるだろう。

新移民にとって、戦前の移民が必要としたコミュニティの相互互助機能はそれほど必要ではなくなってきた。その背景には受け入れ側であるカナダ社会の変化（移民法改正・多文化主義政策推進）があげられる。また新移民の特色として移民法改正に対応した個人移民であるという要素は重要である。それぞれが何らかの技術・能力を認められた上での移住ということになる。その後、その技術や能力が順調にカナダ社会で活かされたかどうかについては個人差があるが、個人でやっていくということがその前提にある。新移民を形容する言葉として「一匹狼的」「一発勝負的」という表現がある。誰にも頼らず自分自身で切り開いていくというスタイルや自分の力でやれるという彼らの自信も含ませた表現である。「一発勝負的」という言葉の背景には、多くの帰国移民者の存在が指摘できる。

次のような事例がある。A氏が移住した1973年は日本からの移住者が特に多く、1100人を上回っていたという²⁹⁾。一方、引き揚げる組も同様に多く、A氏のまわりの知人で3分の1近い人たちが2年～3年で引き揚げたという事実である。帰国理由のひとつには、カナダでは夢や希望が満たされなかったということがあげられる。また、時代的に考察すれば、高度成長時代に入っていた日本の姿を見て、カナダと日本を秤にかけたとき日本のほうが重かったということであろう。この点は旧移民と大きく異なる点である。旧移民にとっては日本へ帰国してもさらに過酷な生活が見えていたため、踏みとどまる以外に選択の余地はなかった時代だったのである。加えて移住形態の相違も

ある。その多くが家族・親族の呼び寄せで日本の同じ地域出身者も多いという戦前の移民にとって、多くの親戚・知人が存在するカナダ日系社会は、日本の出身地域以上に繋がりもまとまりも強い。そのため彼らの行動には「知り合いが多いから勝手なことや悪いことなどはできなかった。悪いことなどすぐに知られてしまうから、ここで生活できなくなってしまう³⁰⁾」という共同体的な規制が働いてきたといえる。一方、新移民の場合は仮に何かを失敗したとしても、カナダにおいて旧移民のようなしがらみはなく、日本へも戻りやすかったと考えられる。

移民の誰もがそうであるように、移住してきたばかりは生活することやカナダ社会への適応で精一杯であり、日系社会や戦前移民の人々の歴史について関心を抱くべくもなかった。新移民の日系組織活動への参加は1977年の日系移民百年祭前後から活発になってきている。日系移民百年祭のプロジェクトも新移民の発案に端を発している。このプロジェクトがきっかけとなってパウエル祭が誕生し、祭りを作り上げていく過程で新移民と一世や二世、三世との交流が生まれ、お互いの理解が進み影響を受けあってきたと指摘できるだろう。そういう点からも、新移民はバンクーバーの日系社会で大きな役割を果たしてきたといえるのである。

最後に新移民の人々が抱いている一般的な「疎外感」について述べておきたい。日系社会の活動を通して、旧移民・新移民の間に横たわる目に見えない問題点が浮かびあがってくる。二世の中には「新移民はわれわれの苦勞を知らない。自分達と共有する歴史を持たない³¹⁾」という態度が一部存在してきた。一方、新移民はパウエル祭で表現される「日本の伝統文化」の変容に不満を抱く。明らかに「日系カナダ人の祭り」を推進することで、伝統的なものではなくなっている。彼らには「正統的日本文化」へのこだわりが残る。そうしたなかで「いつまでも移住者という意識」はついてまわるといえる。日系社会の主流には組み入れられない存在としての新移民の葛藤と言えるものであろう。新移民の現在の自己イメージあるいは他者イメージとして、以下のような特色があげられた。「日本のしがらみから切れている」「開放感」「気楽」「個人主義文化の尊重」、「自立性の強い人」、「日本社会の枠に当てはまらない人」等である。これが

らのバンクーバーの日系コミュニティは、以上のような特色を備えた新移民、そして次世代の二世を取り込みながらさらに多様性を増し、その多様性が日系社会を維持する活動のエネルギーとなっていくのではないだろうか。

補記

本稿は初出論文（『長崎県立大学論集』第35巻第3号、2001年）から表一覧をすべて削除し、さらに、本文の一部を削除・修正し縮小したものである。

注

- 1) 本稿で扱うカナダにおける「新移民」とは、戦後、特に移民法改正後の1967年以降に、日本からカナダへ移住した人びとを指す呼称であり、「新移住者」「新一世」とも呼ばれる。それに対して「旧移民」あるいは「一世」「二世」「三世」は戦前に移住した人々やその子どもの世代、さらにその次世代の人びとを指す呼称となっている。日本における在日中国系、韓国系の人びとは移住時期によって大きくオールドカマー、ニューカマーとに分けられるが、旧移民、新移民という表現はそうした呼称とも関連するものといえるだろう。
- 2) 本稿における日系人の定義としては、日本人を祖先とする日系カナダ人（日本国籍を有しない）から、戦後、日本から移住した世代である新移民（日本国籍を有する）を含めた幅広い意味で扱うものとする。日系カナダ人に関する定義としては拙論（山田2000:89）を参照されたい。
- 3) 日系人人口は1996年国勢調査で68135人（Statistics Canada 1996）と推定され、その割合はカナダ総人口のわずか0.2%であり、文字通りの極小マイノリティである。
- 4) その代表的な見解は新保（1980）、倉田（1983）、Kobayashi, A（1989）等によって提示されている。
- 5) こうした言説の背景には旧移民・新移民の歴史的体験の違いが大きな要因となっていると考えられる。その筆頭として挙げられるのが、カナダにおける旧移民の第二次大戦中の日系人排斥体験であろう。強制移動によって受けた精神的傷。戦後、一から立て直さなければいけなかった生活という日系人の歴史。さらに、旧移民のパイオニア時代の苦労など。そうした経験や体験を長い間語ることのなかった旧移民、

その事実を知らなかった多くの新移民、三世の世代間のギャップは大きかったと考えられる。日系コミュニティにいろいろな団体があっても、パウエル祭が開催される以前には異なる団体や世代が何かを行うために一緒に協力・連帯するということとはなかったのである。それぞれが別個に孤立して機能・活動していた状況であった。

- 6) 調査実施期間は2001年7月27日～8月28日である。この調査は文部科学省の科学研究費〈基盤研究(C)2 課題番号13610361〉、およびカナダ政府2001年度カナダ研究助成金プログラム（FRP）の交付を受けて実施されたものである。
- 7) 移民の望ましさは、大英帝国の帝国主義イデオロギーを反映し、英国からの生物学的、文化的距離によって測られた。もっとも望ましいのはイギリス、アメリカからの「アングロ＝サクソン系」移民であり、次に「他の西欧、北欧人」と続き、「農業志向が強い東欧人」その次に「南欧人」、「ユダヤ人」、さらに「メノナイト」など異宗教を信奉する人々が次に位置した。「アジア人（中国、日本、インド）」、「黒人」は最下層に位置付けられた。
1930年代は国際的な反ユダヤ主義の時代であり、この時代はユダヤ人移民に対して国籍にかかわらず別枠の審査基準が設けられ、厳しく入港を制限された。
- 8) 中国人一人のカナダ入国に際し、CN\$50の人頭税を課した。その額は1901年にCN\$100、1903年にはCN\$500に引き上げられている。後にこの法律は「中国系排斥法（the Chinese Exclusion Act）」（1923—1967）に名称がとってかわった。
- 9) この法は公式に1947年に廃止された。研究者（木村1997:68）によっては1947年をもって権限の回復ととらえるむきもあるが、廃止後も1967年までは種々の細かい条項が存続し制限が課せられており、筆者は1967年をもって一区切りとした。
- 10) 家族の呼び寄せ、技術移住、ビジネス移住、また労働ビザ、学生ビザ、移住者の再入国なども移民法で規制されている。
- 11) 「経済移民」という訳よりは、「経済的自立ができる移民」としたほうが正確性を持つが、ここではその意味を含ませた上で、便宜上、経済移民とする。
- 12) 職業リストは178職種に分けられ、2400職が点数化されている。ほぼ1年ごとに更新されているが、とくに大幅な更新はみられない。現在の職業リストは1993年8月以降のものとなっている。

- 13) 1998年12月29日付の更新では、ハイテク産業（情報産業・ソフトウェア産業）部門の人材が求められており、コンピューター・プログラマーやコンピューター・システム・アナリスト等の得点が高くなっている。また、1999年4月27日付けでは、カナダ移民局から通訳者・翻訳者の募集がでており、コソボ問題の拡大に伴う難民受け入れのため、アルバニア語を英語・フランス語へ通訳できる人の募集である。その能力がある人はこの時期に優先的に移民できるシステムである。
- 14) 1967年以降になるとカナダへの中国系移民は、台湾、シンガポール、英国、南アフリカ、南アメリカ等からも多くの移住があり、1970年代後半から1980年代初めはベトナムからの中国系移民が多くみられた。概して彼らは教育程度が高く、都市生活者という特色を備えているとされ、職業も幅広く事務関係からソーシャルワーカーや会計士までに及ぶ。1986年、1987年には「企業家移民」および「投資移民」の二つのカテゴリーを新しく設けたことにより、香港、台湾、韓国等 NIES 諸国からのミドルクラス・プロフェッショナルの移動が多く見られるようになった。
- 15) 職業の名称は本人の申し出によるものである。尚、職業の紹介順は便宜的にあいうえお順とした。
- 16) 開催期日は2001年8月4日(土)と8月5日(日)の2日間である。
- 17) JCCA (グレーターバンクーバー日系市民協会) 発行の「月報 The Bulletin」2001年7月号 p.55。パウエル祭スタート当初から、カメラマンとしてパウエル祭の記録をとり続けてきた Tamio Wakayama 氏へのインタビュー記事より。この時期の日系社会の動向については、佐々木の論文（2000年）に詳細に述べられている。
- 18) 1970年代に JCCA の会長を務め、また機関誌『月報』編集にも従事してきたゴードン門田氏。1976年にカナダ移住百年祭委員会ができたときの委員長でもあった。本稿では調査地の人々のプライバシーを考慮して、氏名はイニシャルの1字（同姓の場合は他方は2文字）を用いて表現している。女性にはさん、男性には氏を用いている。門田氏の場合、すでに公的にその活動を認知された立場であることで、ここに本名を紹介しておく。
- 19) 場所の安全性（開催場所のオッペンハイマー公園は近年ゲットー化が進んでおり、祭り参加者の安全性が懸念されている）、資金繰り、ボランティアの減少、プログラムのマンネリ化等が指摘されている。
- 20) なお、1947年に結成され各地の JCCA で構成される全国組織の全カナダ日系市民協会（National Japanese Canadian Citizen's Association）は、1980年に全カナダ日系人協会 NAJC (National Association of Japanese Canadian) と改称し、今日に至っている。
- 21) 日系情報誌『ダイヤルバンクーバー2001/2002』55頁参照。
- 22) 1995年8月、2001年8月、開設以来の実質的コーディネーターである山城猛氏への筆者インタビュー。
- 23) 2001年8月、移住者の会会長の久保克己氏へのインタビューから。また、移住者の会については日系情報誌『ダイヤルバンクーバー2001/2002』56頁を参照した。
- 24) 「バンクーバー暴動」と呼ばれている』事件である。「この事件を経験した日本人社会のなかに自らを守るための組織の必要性を訴える声が高まったと考えても決して不自然ではあるまい」（佐々木 1999：200）として、この事件以降、日本人社会の組織化が進んだことが指摘されている。
- 25) 大陸時報社編『加奈陀同胞発展史』第一、1907年参照。
- 26) 8月14日電話でのインタビュー。
- 27) 大陸時報社編『加奈陀同胞発展史』110-112頁。
- 28) 拙著『カナダ日系社会の文化変容—海を渡った日本の村三代代の変遷』を参照されたい。
- 29) 8月8日、HA 氏インタビュー。
- 30) 7月28日、KU 氏（婦加二世・和歌山県出身）インタビュー。
- 31) Wakayama, Tamio 1992 *Kikyo: Coming Home to Powell Street*. Harbour Publishing. p.55.

参考文献

- Anderson, J.Kay. 1991 *Vancouver's China Town: Racial Discourse in Canada, 1875-1980*, McGill-Queen's University Press.
- Canadian Statistics, 1996 Census, Canada.
- Electro-Media Pacific 2001『ダイヤルバンクーバー2001/2002 Vancouver Japanese-Canadian Business Directory』
- JCCA 2001 *The Bulletin/ Geppo* Vol.xxxIII No.7
- Kobayashi, Audrey 1989 *A Demographic Profile of Japanese Canadians: and Social Implications for*

- the Future. Department of the Secretary of State. Minister of Public Works and Government Services Canada, 1998 *Citizenship and Immigration Canada: Performance Report*
- Minister of Supply and Services Canada, 1997 *Citizenship and Immigration Canada: 1997-98 Estimates*.
- Porter, J. 1965 *Vertical Mosaic: An Analysis of Social Class and Power in Canada*, University of Toronto Press.
- Ren, Mei, ed. 1995 "Chinese Canadians Seek United Nations Intervention on Redress" *China News Digest*
- Wright, T. Richard. 1988 *In a Strange Land: A Pictorial: A Pictorial Record of the Chinese in Canada 1788-1923*. Western Producer Prairie Books
- Wakayama, Tamio 1992 *Kikyo: Coming Home to Powell Street*. Harbour Publishing.
- Yee, Paul. 1988 *Saltwater City: An Illustrated History of the Chinese in Vancouver*. Douglas & McIntyre
- フラレス、オージー&エリオット、ジーン 1997[1992] 「多様性から統一をつくり出すこと—カナダの政策としての多文化主義」『多文化主義—アメリカ・カナダ・オーストラリア・イギリスの場合』（多文化社会研究会編訳）pp.159-85、木鐸社。
- 加藤普章 1997「カナダ多文化主義の意味するもの—歴史と政治的ダイナミズム」西川長夫・渡辺公三・ガバン・マコーマック編『多文化主義・多言語主義の現在—カナダ・オーストリアそして日本』pp. 75-91、人文書院。
- 木村和男 1997「多文化主義宣言への道—連邦結成後の移民政策を中心に」西川長夫・渡辺公三・ガバン・マコーマック編『多文化主義・多言語主義の現在—カナダ・オーストリアそして日本』pp.55-74、人文書院。
- 倉田和四生 1983「カナダにおける日系社会の構造と変化」『関西学院大学社会学部紀要』47号、pp. 83-104。
- グレート・バンクーバー移住者の会（The Greater Vancouver Japanese Immigrants' Association of B.C）2000『カナダの常識—カナダ市民権ガイド』。
- 森川真規雄 1994「「多民族社会」への対応—カナダの事例と日本」同志社大学人文科学研究所編『外国人労働者と地域社会』pp.59-97。
- 日本カナダ学会編 1997『史料が語るカナダ 1535—1995』有斐閣。
- 佐々木敏二 1999『日本人カナダ移民史』不二出版。
- 2000「日系移民百年祭とその後の日系人組織再建過程について」『立命館言語文化研究』第11巻第4号、pp.101-23。
- 新保満 1980「日系カナダ人社会の変動—歴史・現状・展望—」日本カナダ学会『カナダ研究年報』第2号、pp.178-92。
- 多文化間精神医学会編 1999『文化とところ』Vol. 4 -No. 3 & 4、相川書房。
- 祖父江孝男 1971『県民性—文化人類学的考察』中央公論社。
- 大陸時報社編 1909『加奈陀同胞発展史』第一。
- 山田千香子 2000「日系カナダ人のインターマリッジに関する一考察—仏教会における通婚パターン分析を中心に」『長崎県立大学論集』第33巻第4号、pp. 67-94。
- 2000『カナダ日系社会の文化変容—海を渡った日本の村三世代の変遷』御茶の水書房
- 2001「バンクーバーにおける日系移民の活動と連帯—「新移民」を中心として」『長崎県立大学論集』第35巻第3号、pp.121-50。